

日本の教育で評価されるのは、「答えを探し出す力」である。しかし、答えを創り出す人もいる。「答えを探し出す人」の育成が進むと、答えを創り出す力も持っていないのかもしれないのかな」と勘違いする人が多くでてくる。たまたま環境があわなかっただけで、自分の能力を最大限に発揮せずに終えることにもつながってしまう。本大学では少人数を最大限に生かし、本質的な話し合いを授業の中で生かすことができる。校外にでて体験ワークもいっただろうし、テーマを決めてグループディスカッションもいっただろう。それには教員同士でもそのような機会を多く持ち、自由に話せる場が必要になってくる。

幸い本大学においても新たな大学改革をしようとしている。選出された委員だけで大学改革をまとめていくのではなく、学科会で委員が一人一人の教員の意見を聞き、さらに良いものにしていく討議を積み重ね、それを委員会ですべてまとめあげ、今後の大学改革で生かしていける絶好の機会が今まさにある。チーム尚絅学院大学が関わっていると思う。

学問では間違えることを恐れては進歩がない。人生の選択を間違いたくないと誰もが思っているであろう。しかしこの思想が人生をつまらなくしていく。「間違いなく」の裏には「みんなと一緒にしとけばいいや」があるだろう。「みんなと一緒に」を別の視点から見れば「誰でもいい」なのである。

「選択を間違ったらいけない」という教育にしてはならない。自分で考え、多様な思考を創り出す教育が求められる。それには、大学のボランティア活動、海外のスタディツアー体験、野外の自然体験活動、部活動、大学の学食で行われている食育、優れた芸術文化に触れる機会を多く体験させる等の取り組みの更なる推進が重要である。また、本大学は地域住民に生涯学習の機会を提供している。地域の人が自由に学べる機会を多く持つことが、新たな自由な発想を創り出す源になっている。今後も更なる推進と奇想天外な取り組みが私たちの教員の発想を高くしてくれると思う。

本大学はキリスト教精神に基づき、一人一人の学生の内面を大切にできる大学である。少人数制の授業を更に生かし、この豊かな自然を更に生かした体験学習も多く取り入れて欲しい。今後の日本を支える創造的な人間づくりのできる学生を本大学の教員が一体となってやっていきたい。そのような魅力ある大学が今私たちの知恵と協力で実現できると思う。

私達教員一人一人が失敗を恐れず、将来の日本を支える学生を育て、日本の将来を支える最先端のチーム尚絅学院大学となって取り組んでいきたい。

## 障害を持った人々との出会いから得てきた経験と学び

小松 秀 茂 (子ども学科教授)

### はじめに

自らの経験を現在の教育にどう生かしているかの観点から書くようにとのご依頼をいただいた。筆者のこれまでの来し方の紆余曲折があまりにはげしく、整然と述べることなど困難であるが、保育者・教員養成教育の場に身を置きつつ、障害を持った人々との出会いが多かった我が歩みを、思うままに振り返ってみたい。

## 1 大学での学び・経験

私は大学（1970年入学）で障害学を学んだ。当時は「心身欠陥学」と呼ばれていて、全国的にも障害学を専攻できる大学は、ごく一部に限られていた。不勉強な学生であったが、僥倖にも大学院に進学することができた。専門は、「知的障害児の心理学的理解と教育」で、中心的な研究テーマは、「知的障害児の発達神経心理学的理解」とその理解・観点からの「空間的思考活動の実験的形成（指導プログラムの開発）」というものであった。大学の教員になることができたのはこうしたテーマのもとに行った研究のお蔭なのであるが、皮肉なことに、これまでの教員生活の中で、自分の研究成果を授業で紹介したことはほとんどない。その意味で自分の本来の研究活動を基礎にして教育活動をしてきたという実感はほとんどないのである。恥ずかしながら。

## 2 障害児・者の教育現場、福祉現場での経験

大学院に通いながら、障害者施設に7年ほどお世話になったことがある。仕事は、脳性マヒなどのために就学猶予・免除された人たちのために、読み書きの指導をしたり、レクリエーションのお手伝いをしたりすることであった。週に1回宿直当番もしていた。この当時の経験には、私の子ども観、教育観に大きく影響したものが多く、後々の筆者の教育活動にずいぶんと役に立った。例えば、

- ・少ない風呂の回数、異性による入浴介助、時間に追われる「豊かとは言えない」食事、時折発生する恋愛・結婚・性の問題、入所期間の長期化等に伴う家族関係の希薄化等々（直接見聞きしてはいないが、当時、他の施設では、体罰を疑わせる指導などの問題もあった）。こうした当時の施設利用者さんの現実の姿そのものが、筆者に強いインパクトを与え、考える材料を提供してくれた。
- ・読み書き指導の場面での経験では、日々の活動に消極的で無気力に見えた脳性マヒのAさん（就学免除されていた中年の男性）のことが忘れられない。ある日、手が自由にならない人のために工夫された特殊な「かな・タイプライター」が導入された。Aさんはそれを見て、「手紙を自分で書くことができるかもしれない」と分かるや、目の色を変えて取り組み始めたのであった。当時、私の周囲にいた脳性マヒの人の多くは、来た手紙は読んでもらい、出す手紙は書いてもらっており、プライバシーが守られた交信は難しかったのである。
- ・当時、機能訓練の場で出会った重症心身障害幼児Bちゃんのことも忘れ難い。Bちゃんは、見えているのか、聞こえているのかさえ判別がつかないくらい反応の乏しい子どもであった。訓練の効果が見えず、他県の専門施設に入所することが決まった。親子が分かれて1週間くらいした頃だったか、お母さんから連絡があった。「うちの子が反応した」と。聞けば「食べさせようとしても、食べない」ということらしい。「抵抗」の意思を示したものと考えられた。「どんな子にもその子なりの内面世界があると思ってかかわらなければいけない」と、この時心に刻んだ。今でも時折、授業で話すエピソードの一つになっている。
- ・筆者自身の直接の経験とはいえないのだが、特筆したいエピソードがある。ある小学校に目の不自由な障害女児Cさんが転校してきた。Cさんは、「奇妙な行動」を見せた。休み時間になるとグラウンドに飛び出して行って自分の顎くらいまでの長さの竹の棒にちょこんと頭を乗っけてじっとしているのであった。「障害児だからこんな理解できない行動をするのね」の声が多い中、担任の若い先生は納得せず、「何してるのー、まぜてー」と言って、Cさん

の行動をまねてみた。すると、竹を伝わって音が聞こえてきたという。女兒は感覚遊びをしていたのだ。奇妙に見えた行動は不思議でも何でもなかったのである。「目線を寄り添え共感する」ことの大事さを教えてくれたエピソードである。

こうした経験は、後に私が担当した保育実習（特に施設実習）指導、介護等体験指導、障害児保育・教育関連の授業で大変役に立った。利用児・者の目線に立った支援の大事さを、具体的経験を基に伝えることが可能になったからである。

### 3 保育者・教育者養成施設での経験

短くない期間「オーバードクター」を重ねた後に、保育者・教育者養成施設の教員になった。そこでは、恥ずかしいほどに多岐にわたる授業科目を担当した（せざるを得なかった）が、今となってみれば、得難い経験をさせていただいたと感謝している。

着任直後、ボランティアサークルで学生たちと活動を共にした。「何をしたらいいですか」と聞くので、当時仙台でも開始され始めた「障害者のためのマップ作り」を提案した。合宿までしての作業であったが、案外にうまくいき、地方紙にも取り上げられた。教員という仕事に初めて手ごたえらしきものを感じさせてもらった経験であった。

教員生活に少し慣れてきた頃、「障害児教育を考える会」の活動を始めた。幼稚園、保育所、小学校の先生たち10名ほどが月1回のペースで集まり、学習会をした。当時の保育者・教育者たちは障害児を受け入れても複数担任の体制など期待できず、孤軍奮闘していた。参考書も少なく、自分の保育・教育をどう組み立てていったらよいか、一人で悩む先生が多かったのである。今でいうADHD（注意欠如多動性障害）の子を受け入れていたある幼稚園の先生の学級を訪問した時など、その子の「逃亡」を防ぐために、保育室のドアにカギをかけた状態で保育をしていた。当時は、親の方も大変であった。配慮が必要な子どもを受け入れてもらうには「母子登園（子どもと一緒に親も通い、保育を見守る）」しなければならないケースがかなり多かったのである。親たち、保育者・教育者たちの目線を意識し始めたのは実質この頃であったと思う。

当時の私の重要な仕事の一つに実習指導があった。問題が発生して受け入れ先から「ご指導」を受ける機会が多かったのは、いわゆる施設実習であった。実にさまざまな「ケース」に遭遇し、「鍛えられた」。

- ・交通の便が悪いところにある施設まで無断で車で行って、よく確かめずに駐車して民家に迷惑をかけ、挙句に警察のお世話になってしまったケース。
- ・入所児の「試し行為（施設職員の悪口を言ったり、自分の親の悪口を言って実習生に同意を求めたりする等）」に、思わず「乗せられて」しまい、お叱りを受けたケース。
- ・不潔感をただよわせる入所児・者と一緒に食事ができず、「おなかの調子が悪い」と言って自室に戻り、「買い食い」で済まそうとしたら見つかって叱られたケース。
- ・寂しそうな様子の入所児に同情して、自分への連絡先を教えたら、実習終了後、その子が「逃亡」して訪ねてきてしまって大騒ぎになったケース。

とにかくいろいろと「ご指導」をいただいた。大変ではあったが、筆者にとっていい経験ではあったと、今になってみれば思う。

#### 4 アート系大学での経験

アート系の大学に10年間お世話になった。そこで得た経験で一番大きかったのは、ボランティアサークルでの活動である。当時、学齢に達した障害児たちは、学校以外、街のなかに居場所を見つけることは大変難しかった。そこで、希望する子どもたちを対象に、月1回のペースで「障害を持つ子どもたちと共に描き、作る会」の活動が行われていたのである。子どもたちは、多様で個性豊かな集団であった。学生たちは、例会前に入念にプランを練り、準備した。子どもたちに「また来たい」と思ってもらえるように、と。

学生たちは、どんな作品にも敬意を表した。彼らは一人ひとりが卓越した描画技術を持っていたが、「絵がうまい」を鼻にかけることはしなかった。少なくとも「うまい」にこだわることをしなかった。子どもたちの作品には絶対に手を加えず、ありのままに受け入れ、それを大切に扱い、展示した。一人ひとりの作品に光が当たる。そして、その作品を通して、表現者と鑑賞者が「対話」をする。その対話がまた表現活動を豊かにしていく。この活動を通して筆者は、「美しいものにあこがれる」「美しいものを作ろうとする」「美しいものを大切にする」心の尊さを教えられた。絵心が乏しく、絵を理解しようとしなかった筆者にとって、最大の学びの一つとなった。

#### 5 自閉症のDさんとその家族から学んだこと

筆者の身近に、自閉症のDさんがいる。20年を超えるつきあいである。Dさんが示す特徴には「教科書」に出てくるような典型的なものが多い。軽度とは言えない。知的障害も併せ持っている。平均的な生活を自立して営んでいくにはかなりの困難を伴う。

しかし、Dさんには、家族がいる。この家族がすばらしい。家族が醸し出す雰囲気ですばらしい。とにかく明るく、笑いが絶えないのである。この家族にDさんは支えられ、心的安全基地を確保しつつ、自らの世界を広げようとしているように見える。

この家族から筆者は、とても大切なことを教えてもらった。

「障害を持つことは幸せになれないということではない」と。

#### むすび

筆者の大学教員生活も最終盤に差しかかってきた。終わりをどう迎えるかなどと考える余裕もないまま、附属幼稚園長という大役を拝命してしまった。「子どもはかわいい！」とだけ言っていては園長の仕事はおそらく務まるまい。何と言っても、幼い子どもたちの命を預かる教育・保育の現場なのである。子どもに被害が及ぶ失態は許されない。ましてや、子どもたちの中には「特別な配慮」を要する子どもも少なからずいる。また、保護者の中にも困難を抱えて子育てをしている方々がいる。そうした人たちも参画している幼稚園での保育・教育活動が十全に展開されるためには、周到な支援体制を構築し、維持する努力が必要である。

幼児教育現場における要点の一つは、子どもたちの生活と遊びが豊かになるように教育・保育体制を整えることである。そのためには、子ども学科との有機的連携を強めていくことが非でも求められる。現在、本学子ども学科は新たな方向性を求めて再編の道を歩み始めているところであるが、どんな考え方と方針で教育の業を展開していくべきか。大学としての生き残りはもちろん大事であるが、尚絅学院が大切に育ててきた「他者とともに生きつつ、グッドネスを心がける」の精神を忘れることなく、事に当たっていきたい。